

信頼される学校づくりを目指して

旭市立干潟中学校長 さいとう 齊藤 みのる 実



1 はじめに

本校は昭和47年4月、干潟町立東中学校、西中学校が合併統合し、干潟町立干潟中学校として発足し、その後、平成17年7月に旭市・干潟町・海上町・飯岡町の合併により、旭市立干潟中学校として新たに発足した学校である。学区には、大原幽学遺跡公園や千葉県総合スポーツセンター東総運動場などが整備されている。

保護者には本校の卒業生も多く、協力的な地域・保護者、そして、明るく素直な子供たちと協力性のある職員に囲まれ、学校経営を進めることができています。

教育目標「主体的に生き生きと行動する生徒の育成」の実現を目指すとともに、昭和55年に設定された「われらの信条」の下、充実した教育活動を全職員で行っている。

われらの信条

干潟中学校は、躍動する若い力の学校である。
心美しい生徒の学校である。
花と緑と、そして、小鳥のうたう学校である。
教師、保護者、生徒、心を合わせて、力と美の学校をつくろう。

2 目指す学校像の実現に向けて

(1)保護者とともに歩む学校づくり

本校では、目指す学校像を「成長が実感でき、安心して過ごせる学校、環境が整えられ、安全で美しい学校、情報を発信し、保護者や地域に信頼される学校」としている。

生徒、保護者、地域の実態を把握し、学校、家庭、地域の三者が同じ方向を向いて子供た

ちを育てていくことが、最も効果的であると
考え、互いに情報を共有し、実践の目的や目
指す子供の姿を明確にすることを大切にして
いる。

(2)情報発信と情報収集（学校だよりの活用）

保護者が知りたいと思っていること、学校
の取組で理解してもらいたいことなどを毎月
の学校だよりに掲載するとともに校長の経営
方針も載せている。また、「保護者の声」（保
護者からの意見・要望）を回収し、代表的な
ものを次号に掲載し、必要に応じて学校から
の回答を掲載している。

①生徒が決めた目標の紹介

生徒会が決めた目標を始業式の中で生徒
会役員から全校へ伝える場面を設けている。

〔生活〕○大きな返事、すすんで挨拶

○時間を意識し行動にけじめをつける

○自分で考え、無言で清掃

〔学習〕○一人一人が積極的に授業参加

○理解しようとして聴く

○その日のうちに家で授業を思い起こす

各目標についての自己評価を毎月行い、評
価が低い場合は呼びかけを行うなど、PDCAサ
イクルを取り入れた活動をしている。また、
学校だよりで目標を紹介したところ「保護者
の声」には家庭での協力を啓発するものが多
く見られた。

②携帯・スマホの使用について

学校評議員や保護者から本校の携帯・スマ
ホの所持率が高くなり、いじめ・不登校問題
が心配されるため、正しい使い方を指導して

ほしいとの要望があった。そこで、実態を把握し、「干潟中7つの約束」を定め、保護者への周知を行うとともに、家庭でのルール作りについて学校だよりを通して呼びかけた。

第4号
平成30年6月4日
発行

干潟中だより

旭市立干潟中学校
旭市入野2170
0479-68-2456

【教育目標】「主体的に生き生きと行動する生徒の育成」 ○広い心 ○賢い頭 ○逞しい体と心

携帯電話・スマートフォンについて

○4月に実施した干潟中調査結果	
ア. 携帯・スマホを所有しているか？	エ. フィルタリング契約をしていますか？
所有している 70%	している 34%
保護者のものを使用している 17%	していない 25%
所有していない 13%	わからない 41%
イ. LINE・フェイスブック等のSNSを利用しているか？	オ. インターネットなどで他の生徒からの言動で苦痛を感じたことがありますか？
利用している 78%	ない 97%
利用していない 22%	ある 3%
ウ. 1日どれくらい利用しているか？	
30分未満 12%	
1時間未満 19%	
2時間未満 41%	
2時間以上 28%	

「ある」と答えた事案については、すべて
問題解決しています。

このアンケート結果を受け、本校では携帯電話・スマートフォンの使用について、ルールをつくりました。ぜひ、別添資料も参考にいただき、ご家庭でお子様とルールについて話し合い、「〇〇家のルール」をつくっていただきたいと思います。

【干潟中 7つの約束 携帯電話・スマートフォンの使い方】

1	学校に携帯電話・スマートフォンは持ち込まない。 ※家庭の事情で、どうしても持たせたい場合は、保護者が学校に相談する。
2	夜10時以降は使用せず、家庭で決めた場所で保管する。 ※「保護者に預ける。」「部屋に持ち込まず居間に置く。」など
3	他人が嫌な思いをする書き込み等は絶対にしない。
4	SNSサイト等に、名前、顔写真、学校名等（個人情報）は掲載しない。
5	友達にメールやメッセージのやり取りを強要しない。
6	夜10時以降にメール等が届いた場合は返信しない。
7	トラブルに巻き込まれた場合は、すぐに保護者または学校に相談する。

別添資料 ・千葉県教育委員会HPより スマートフォンの使用（中学校）
校長室より

裏面に「自分でできるケータイ・スマホの使い方チェック」を掲載しています。お子様のチェック内容を確認していただき、ご家庭のルール作り役立てていただければと思います。

(3)職員の共通理解と共通実践

四つの特別部会を時間割に組み込み、情報交換や今後の取組等について話し合い、共通理解と共通実践の基盤としている。

- ・学年主任部会 ・学習指導部会
- ・生徒指導部会 ・特別支援部会

各部会には管理職も入るため、学校の生命線とも言える「報告・連絡・相談」の充実が図れている。また、各学年の職員で構成されているため、全体への周知もでき、合理的である。更に、本年度から業務改善に関わる議題も取り上げるようにしている。

3 目指す生徒像の実現に向けて

本校では生徒の実態を踏まえ、「広い心を持

った生徒、賢い頭を持った生徒、逞しい体と心を持った生徒」を目指す生徒像としている。

日々の教育実践に加え、年間を通して特色ある行事を設け、目指す生徒像に近づくように努めている。また、機会ある毎に生徒像について触れ、意識させている。

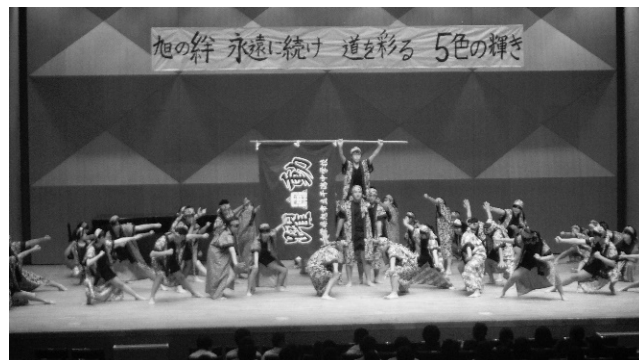
(1)弁論大会（干潟ライオンズクラブ後援）

学級発表会で代表を決め、代表者8名により順位を競い合う。ライオンズクラブ会長やPTA会長にも審査員を依頼し、講評をいただいている。

(2)伝統のソーラン節

全校生徒によるソーラン節演舞を体育祭で発表している。先輩から後輩へ演舞指導を行うなど熱心な取組が見られる。

3年生は文化祭でも披露し、さらに千葉県立東総文化会館で行われる旭市合同文化祭でも毎年ステージ発表を行っている。



旭市合同文化祭でのソーラン節演舞

4 おわりに

校長として2年目を迎えたが、保護者をはじめとした地域の方々の支えと職員の努力により、子供たちは生き生きと学校生活を送っている。これからも生徒にとって、この学校でよかったと思える学校（誇りと愛着）、そして、保護者にとって、干潟中に通わせてよかったと思える学校（安全で安心）、さらに、職員にとって、働きがいのある職場（協働と和）となるよう校長としてリーダーシップを発揮していきたい。

生徒・保護者・地域から信頼される蔵波中を目指して

袖ヶ浦市立蔵波中学校教頭 しらき かつや
白木 克也



1 はじめに

本校は、昭和62年4月に開校し、今年度で33年目を迎えた学校である。学区は袖ヶ浦市北部に位置し、新興住宅地の造成に伴って新設された学校であり、現在も学校周辺を中心に造成が進められている。地域や保護者の学校教育に関する関心は高いものがあり、生徒も、地域に見守られる中で、学習や部活動に熱心に取り組んでいる。

私は、昨年度、新任教頭として本校に勤務をすることとなった。以前に勤務したことがある学校ではあったが、その当時とは、職員の年齢構成や学校周辺の環境が大きく変化していた。ほぼ手探りの状態ではあったが、職員や地域の協力を得ながら取り組んできた一端について述べていきたい。

2 これまでの取組

(1)家庭・地域と共に伸びる学校

生徒の健全な育成を図るためには、学校・家庭・地域の連携が重要である。本校では、その連携の柱として、PTA活動の充実と学校支援ボランティアの活用の2点がある。

1点目のPTA活動の充実は、新興住宅地を主な学区とする本校にとって、学校を理解していただくためにはとても重要である。教頭として、まず役員の方々との話し合いを綿密に行うことを大切にしている。そして、活動のスタンスを「それぞれの保護者、家庭が協力できる範囲で協力しよう」を合言葉に特定

の保護者、家庭に負担を強いることなく、できる時にできることで協力していただいている。具体的には学校花壇等の花の植え替えと水やり、行事前の除草作業、資源回収などが行われ、これらの活動については生徒も参加し、保護者と活動を共にする機会としている。

2点目の学校支援ボランティアの活用として、昨年度より定期テスト前の放課後の補充学習の時間に教員の指導支援をしていただく学習支援ボランティアの活動がある。生徒の学習支援に関わる活動に地域の方が入ることに当初は教員も生徒も慣れていなかったが、個別指導に重点を置き、一人一人の生徒に細かな対応をすることから始めた。活動後、ボランティアの方々から、実施する学年・教科や指導形態・人数配分など多くの意見をいただいた。今後の改善のための参考意見とさせていただき、更なる充実を目指していく。

(2)日々の授業改善と校内研修の充実

近年、ミドルリーダーと言われる中堅教員が少なく、若手教員が多いという職員構成の学校が多い。本校においても例外ではなく、生徒の学力向上のための指導力向上と授業改善が大きな課題となっている。更に、新学習指導要領の完全実施に対応した指導も求められている。そこで、若手教員の育成を中心とした指導力向上、授業改善について教務主任・研究主任と協力して2点取り組んでいる。

1点目の取組は、授業規律の確立である。本校には、「授業の約束」「蔵波中学校職員が

目指す授業10カ条」がある。「授業の約束」には授業を行う上での基本的事項として、学習規律や教師の授業の心構え等が示されている。

「目指す授業10カ条」については、月毎に10カ条チェックシートとして、週案と一緒に綴じている。個々の教員は月末に5段階で自己評価し、シートに記録している。更に提出された週案を学年主任、教務主任、教頭、校長の順で確認し、10カ条のうち、努力を要する項目は何かを明らかにし、翌月以降の改善すべき重点として、教員に周知し、意識化を図るようにしている。

2点目の取組は、相互授業参観である。本年度は校長より月1回、年8回程度の相互授業参観の実施が目標として示された。授業の専門的な内容については、講師を招き研究授業を行っているが、日常的に行う研修として、相互授業参観は大切である。教科に関係なく参観を行うことで、各教員が自分の授業の進め方を振り返る機会とするとともに、ベテラン教員が若手教員に指導する機会ともなっている。僅かな時間しか授業を見られないこともあるが、教職員間の話題となっている様子もうかがえ、若手教員にとって良い刺激になっている。

(3)教職員の働き方改革

教職員の働き方改革については、報道等でも取り扱われることが多くなり、昨年度受講した新任教頭研修のグループ協議でも学校の喫緊の課題として取り上げられた。本校においても長時間勤務をしている教職員は多く、働き方改革は重要な課題の一つであった。本校での働き方改革の取組としての勤務時間縮減と校務支援システムの活用について述べる。

1点目の勤務時間縮減については、市教育委員会が導入したタイムカードを活用し、自

分がどれくらい働いているかを確認し、意識させている。同時に、管理職が長時間勤務者との会話の中で勤務時間について話題にすることや一斉退勤日の設定、今年度より始まった部活動ガイドラインに沿った部活動を実施することで、勤務時間縮減を図っている。現在は、まだ劇的な改善は見られていないものの、可能な限り早く退勤しようとする雰囲気職員室内に生まれてきたように感じる。

2点目の校務支援システムの活用については、本市でも昨年度より導入され、出席簿、通知表、指導要録の作成等に校務支援システムを活用している。昨年度は導入初年度ということで、使用方法に戸惑う面も見られたが、今年度は、順調に活用されている。また、打合せにも利用し、掲示板機能を使い、連絡で済むような内容については、掲示板に書き込み各自で確認する方法にした。このことにより、毎日の朝の打合せに時間的余裕ができています。

3 おわりに

本校に着任し、2年目を迎えた。日々、校長から教職員に対して様々な助言・指導をいただいている。その中で繰り返し強調されていることは「社会人としての能力を身に付けること」と「即対応」である。地域から「学校は」「先生は」と特別な見方をされることもあるが、世間の常識等に照らして、当たり前のことが当たり前に行えるようにすること、そして生徒や保護者、地域からの要望に素早く丁寧に真心を込めて対応することを心掛けている。教頭として率先垂範し、更に信頼される学校となるように今後も尽力していきたい。

多くの先生方に感謝…教職員との繋がりの大切さ

県立八街高等学校主幹教諭 こうご たかのり
向後 孝憲



1 はじめに

平成28年度に八街高校に赴任、平成29年度より教務主任、昨年度より主幹教諭という立場で校務に関わっている。教務主任を依頼されたときを振り返ると「不安」でいっぱいだった。そんな「不安」を解消してくれたのが、当時の教務部の先生方だった。

2 私の原点…教務部のまとまり

平成29年度の八街高校教務部は、八街高校赴任3年目の先生が2名、私を含め2年目の先生が3名、1年目の先生が6名の計11名、八街高校での経験が浅い先生方で構成されていた。

総合学科である八街高校は、単位制、自由選択の教育課程で100以上の選択科目があり、普通科や専門学科の高校とは勝手が違うことが多く、初めて経験することが多い学校であった。更に私自身が前任校まで教務部未経験だったことも重なり、教務部の先生方は皆「不安」を抱えながら仕事をしていたのではないかと思う。

私以外の10名の先生方も、前任校まで教務を経験された先生方が少なく、見ることも、やること全てにおいて初めての仕事が多かったようである。ただ、分からないながらも、皆で「協力」してたくさんの仕事に対して、非常に前向きに取り組めたことが、私自身とても救われ、「不安」を少しずつ解消することに繋がった。

八街高校における教務主任の大きな仕事は四つ、「教育課程編成」「選択科目精選」「行事予定決定」「入学者選抜」である。そして、「コ

ンピュータ管理」「考査監督割振り」「自習監督の割当て」など、教務部の仕事は大変な量であり、各先生方は苦労が絶えなかったと思う。振り返ると、一つの「個」ではできなかったことを、教務部の「まとまり」で乗り越えることができた日々を昨日のように思い出す。本当に先生方がまとまっていた。そこでの経験が今の原点である。

3 先生方と共に明るい未来へ…

現在は、主幹教諭としても学校運営に携わっている。視野を広げ、幅広い見識を持てるよう努力し、多くの先生方同士の橋渡しができるようこれからも精進していく所存である。

教務部をはじめ、生徒指導部、進路指導部等、多くの分掌の先生方と「協力」して、学校をより良い方向へ導いていく。何よりも先生方との繋がり、生徒との繋がり、地域との繋がりを大切に、学校を運営していく。

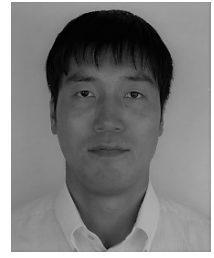
学校運営は一人では絶対にできることではない。小さい「個」が組織として一つになり、組織が「協力」していくことで更に大きな組織に発展していく。そして、その発展こそが「チーム学校」として、未来を担う生徒の育成を可能にするのではないかと感じている。

ここまで、多くの先生方に支えてきていただいた。本当に感謝の一言である。これからも校長、教頭をはじめ多くの先生方と「協力」しながら、素晴らしい組織を築き上げていきたい。そして、生徒たちの夢を実現する手助けをすべく、主幹教諭として明るい未来へ学校を動かしていきたい。先生方と共に。

教師として、一人の人間として

茂原市立東郷小学校教諭

かたおか こういち
片岡 広一



「先生、今日の休み時間に一緒に鬼ごっこしようよ！」新学期が始まってしばらくたった頃、昨年度担任していた3年生の児童に遊びに誘われた。初任者研修の中で、「児童と遊ぶことで信頼関係が築ける。」と教えていただいたことを思い出した。児童と一緒に全力で逃げたり、追いかけてたりして遊ぶ中で、明るい笑顔や人間関係など、新たな発見がたくさんあった。それからは、時間を見つけては、児童と遊んだり、会話をしたりする時間をたくさん作った。

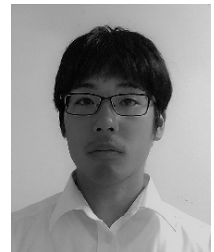
初任者としての1年間を振り返ったときに、教師と児童という関係はもちろんだが、お互いが一人の人間として接することの大切さを痛感した。児童との一定の距離を保ちながらも、時には子供と同じ目線に立って、一緒に喜んだり、悲しんだりすることが信頼関係づくりにつながると実感した。また、1年を通して立派に成長した児童の姿を見ることができ、学級担任としてのやりがいを感じることもできた。

今年度は最高学年である6年生の担任として、子供たちの気持ちに寄り添いながら、より良い関係を築こうと試行錯誤する日々が続いている。昨年度の経験を生かし、教師として、一人の人間として、子供たちと共に成長できるよう、努めていきたい。

「待つ」ことの大切さ

銚子市立銚子中学校教諭

ますだ りょうと
増田 峻人



採用されて2年目となり、1年生の担任を任されている。日々、生徒と向き合う中で悩みをもつ場面も多いが、初任者研修で教えていただいたことを土台にして、先輩の先生方からご助言いただき、生徒たちと充実した日々を過ごしている。

初任研の講師の言葉で心に残っているものがある。それは、「教員は教えることが好きだから、我慢して見守ることを意識しないといけない」という言葉である。学級や部活動で生徒を指導していると、時間的なゆとりがなく、つい口を出してしまうときがある。その場では生徒の行動は変化するが、次に似たような場面に遭遇しても行動は変化しなかった。もちろん、待っているだけで何も関わりがなければ生徒は成長することができない。一つ一つの言動にねらいをもって生徒の指導に当たり、長期的な展望をもった積極的な「待つ」を実践していきたい。生徒が自分で気付いて何かを得られれば、自発的に行動を変化させてもっと成長できるはずだと考える。日々生徒と関わる中で、「待つ」と「指導」することのバランスは難しいと感じるが、今後の課題として取り組んでいきたいと思う。初心を忘れずに、先輩の先生方を手本にしながら日々勉強し、生徒と共に成長していけるように精進していきたい。

総合的な学習の時間を通して育む地域愛

野田市立宮崎小学校教諭

かねき なつみ
金木 夏海



1 はじめに

昨今、地方都市において若者の地域離れが問題視されている。以前赴任していた流山市においては、つくばエクスプレス沿線で土地開発が進められ、急速に人口が増加する一方で、昔からの街では若者が減り、シャッターを下ろす店も少なくない。若者が都市部に流出する一因として、彼らが幼少期に生活の中で、地域の良さを理解する機会が少ないことが挙げられるのではないだろうか。前任校である流山北小学校では、「地域」を素材とするカリキュラムを核として、児童の主体性を育むことをテーマに総合的な学習の時間の研究を3年間行ってきた。新学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業展開が求められている。そこで、前任校で担任した6年生での取組を紹介したいと思う。

2 授業実践の概要

年間計画は、1学期は職場体験学習を含めたキャリア教育「夢発見プロジェクト」、2学期は本誌で主に紹介する地域学習「目指せ発展！流山向上委員会」、3学期は「感謝」をテーマに卒業までの残りの日々でできること、すべきことを考え、計画・実行する「卒業プロジェクト」となっている。どの計画も教師主導とならぬよう、「ひと」との関わり方や出会わせ方、学習形態などを工夫してきた。子供たちが話し合い、今後の活動の方向性を決定していく。もちろんそのためには、根回し、

布石を打つ等の事前の準備が欠かせない。課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現といったプロセスが繰り返し発展的に行われることをイメージし、自分たちで学びを切り拓いている感覚が持てるような授業づくりを心掛けてきた。「目指せ発展！流山向上委員会」の指導計画は以下のとおりである。

指導計画

時間	学 習 内 容
一次	「流山ってどんな町？」 流山イメージマップを作る 流山について調べる
二次	「詳しい人から話を聞いてみよう」 G Tから話を聞く G Tからの話をもとに学習課題を見出す ※G T＝流山市役所経済振興部流山本町・利根運河ツーリズム推進課の方
三次	「流山を支えている人たちの思いを知ろう」 実際に街を歩いてみる 史跡ガイドの会の方の思いや願いに触れる
四次	「流山をPRするための企画を考えよう」 集めた情報を整理する 班ごとに企画を考える 学級でプレゼンテーション大会 学年でプレゼンテーション大会

(1)一次「流山ってどんな町？」

2学期に入り、流山の歴史や魅力をテーマに学習を進めていきたいとの意見から、流山のイメージマップを書いた。すると、意外にも自分たちが地域について詳しく知らないこ

とに気付き、まずは自分たちの力で調べてみようという学習がスタートした。情報を集めるため、インターネットやパンフレットで流山の歴史や魅力について調べる中、市役所に観光資源の開発・推進を行う課があることを知った。課の方から直接お話を聞いてみたいという思いから、伝えたいことや聞きたいことを事前に話し合ってから整理し、市役所に電話をかけた。代表児童が思いを伝え、後日G Tとして学校に来ていただけることとなった。(子供たちが電話することや、G Tの依頼、日程等は事前に打合せておいた。)

(2)二次「詳しい人から話を聞いてみよう」

G Tとして市役所経済振興部流山本町・利根運河ツーリズム推進課の方を学校にお招きし、お話を伺った。流山の歴史、おすすめの観光名所等、スライドショーを用いながら地域の魅力を存分に教えていただくことができた。また、事前に学習の目的を伝え、了承を得た上で、後の学習課題となる「どうしたら街に人が集まるか？どんな商品があったらいいか？小学生の自由な発想でぜひ企画を考えて、提案してほしい。」という願いを語っていただいた。G Tからの願いを受け、その後の話合いで「自分たちで流山をP Rする企画を考えたい。」という思いが学習課題につながり、活動の目的と方向性が明確になった。

(3)三次「流山を支えている人たちの思いを知ろう」

流山には、市内の史跡・観光を巡り、ガイドをしてくださる「N P O流山史跡ガイドの会」がある。(G Tから子供たちへ提案していただいた。)今後の方向性を話し合う中で、「実際に街を歩いてみたい。」という思いが高まり、史跡ガイドの会へガイドを依頼した。街歩きをしながら史跡を生で見て、歴史的背景を知ること、改めて地域の魅力を肌で感じることもできた。また、「地域の魅力をたくさんの

人に知ってほしい。」という史跡ガイドの会の方の思いに触れることで、企画への構想を膨らませ、意欲を高めることができた。

(4)四次「流山をP Rするための企画を考えよう」

これまで調べた事や得た情報を整理した後、いくつかのグループに分かれ、流山をP Rするための企画を考えた。話合いを経て企画をまとめあげた子供たちは、まず学級の中でプレゼンテーション大会を行った。どのグループの企画も素晴らしいものであったが、学級代表を決定し、後日市役所の方を再度お招きし、学年全体でのプレゼンテーション大会を行った。体育館壁面に全グループの企画資料を掲示し、他学級の企画を自由に見回る時間を設けた後、学級代表のグループが、市役所の方の前で企画のプレゼンテーションを行った。史跡を巡るスタンプラリー、流鉄の廃車を利用した博物館、ご当地ガチャガチャ、グルメフェスなど、実に子供らしい柔軟なアイディアで、様々な企画を考えた。また、企画の話合いやプレゼンテーション大会での真剣な眼差しから、「流山の良さをたくさんの人に知ってもらいたい。たくさんの人に流山に来てもらいたい。」という主体的な姿が見て取れた。

3 おわりに

地域を良くしていきたい、地域に貢献したいという思いを育む上でも、自分たちの生まれ育った地域の歴史や魅力を知ることは、重要である。カリキュラムの再構築や修正は、時数確保の問題や通例となっているものもあり、難しいこともあるが、今後も目的意識と必然性を明確にし、子供たちの学びへ向かう主体的な態度を育てられるよう、日々の授業づくりに取り組んでいきたい。

心を育てる美術の授業を目指して

習志野市立第三中学校教諭

くさかべ りえこ
日下部 理英子



1 学習指導要領の改訂を受けて

今回の学習指導要領の改訂で、各教科において「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性等の涵養」の三つの資質・能力を育成することが示された。

改訂は、時代や社会の変化に対応して、行われる。しかし、どんなに社会が変化しても、美術が「目に見えるものや目には見えない心、感情、イメージ、発想などを、形・色・材（料・質）で可視的・可触的（ビジュアル）なものに表現し、実体化する能力を育てる」唯一の教科であることに変わりはないと考える。本校の美術の授業では、この特性を生かし、「心を育てる」ことも大きな目標にしている。

2 本校における美術の授業

本校では、美術の授業を通して、「育成する資質・能力」「目指す生徒の姿」を次のように押さえている。

(1)美術の授業で育成する資質・能力

- ・表現活動を行う時に必要な基礎的理解と基本的技能。
- ・感じ取ったことや考えたことを基に行う表現活動を通して、発想や構想の力。
- ・美しさや良さを感じ取り、豊かな感性を育み、美術で学んだことを生活に生かす姿勢。
- ・美術文化への関心を高め、日本の伝統文化を大切にする心情。

(2)美術の授業で目指す生徒像

- ・表現や鑑賞の学習を通し、創造活動を楽しみ、豊かな感性を育てることができる生徒。

- ・学習したことを生活の中に生かし、美術を愛する心情を持つ生徒。
- ・伝統文化を大切にし、誇りに思う生徒。

3 心を育てるための授業の工夫

(1)表現意図を明確にする

生徒の表現意欲を高めるためには、全ての題材が難易度の高いものである必要はないが、ある程度の困難さを感じる題材を設定した方が良いと考えている。一人一人の欲求と技能に合わせた支援を用意した上で、各自が表現意図を明確にできるように、制作カードを活用している。自分が表現したいことを、文章やスケッチを取り入れてイメージし、形にしていけることで主体的な取組を引き出している。

～ 箱の中のもう一つの世界～
BOX ARTの制作

2年 組 番 氏名

1 今までで一番印象に残っていることは？（思い出、後悔、なんでもOK）
家族と初めての旅行に行き、海がキレイだった。

2 将来やってみたいことは？1年後でも、10年後でも その先でもOK）
ダンス、色々な所に出かけてみたい、好きなアーティストのライブに行きたい。

3 最近一番興味のあることは？ 4 今、一番ほしいものは？
ダンス・音楽 学力・お金・本

5 行ってみたい場所は？（実際には行けない世界がいいかな）？
海外・日本の色々な場所 オシャレな服屋・小物屋

6 住んでみたい場所は？（どんな場所でもOK）？
東京・海外（アメリカやイギリスなど）

7 今回は想像の世界を創ります。どんな世界を創りますか？
遠く離れた海の中をめぐって探るこの世界に、いろいろな美しい動物や、古くからの建物や、水でも大丈夫な家もあり、地上にはよく見る鳥もあり、花も咲いていて、しばらくすると、イルカの群れがきて、なにかを伝えるかのよう動き、絵を書いたり、おどっていたりして自分自身、よくみえまわっている。

(2)板書を効果的に使う

どの教科でも授業の1時間はとても大切である。授業時数が決して多くない美術の授業ではなおさらである。制作が主体の授業であるから、授業の内容、流れ、本時で何を学ぶかを短い時間で一人一人に伝えなければならない。そのために、板書を工夫している。

本校では「三中学びスタイル」として、その時間のねらい（目標）は青いチョークで囲って示している。学区の小学校と共通しており、生徒はその時間の授業で何を学ぶのか、一目で理解できるようになっている。また、その時間の手順をフローチャートで示し、確認しやすくした。

また、先輩の作品や資料も提示し、自分の表現意図を満たすための参考にできるようにした。目を見て確認できることで、制作に多くの時間をかけられるだけでなく、より主体的な制作姿勢が見られるようになっている。

(3)自己評価と相互評価を取り入れる

授業の最後に「本時の目標」を振り返る時間を設けている。各自が授業を振り返り、自分で頑張ったことを見つけ、反省し、次時への展望を持てるようにしている。また、題材の終末には、自己評価のまとめと相互評価も行っている。

自分の良さを他者から認めてもらうことは、自己肯定感の向上につながる。相互評価をする際は、「お互いの良さを認め合う」という留意点をはっきり意識させている。また、私自

身も授業の中では一人一人を「誉める＝認める」ということを常に心掛けている。

(4)行事や夏休みを活用する

1年生の夏休みに「美術館に行こう」という課題を設定し、本物の作品を見に行く機会を作っている。また3年生の修学旅行では、総合的な学習の時間も活用して「旅ノート」の制作に取り組んでいる。どちらも、時間数は、1～3時間ほどしか使わないが、鑑賞の学習として、重要なものになっている。



3年生 旅ノートの表紙

4 より充実した授業を目指して

授業は教師と生徒で創るものである。楽しい美術の授業とは、一人一人が表現したいことを見つけて、意欲的に制作に取り組み、難しいことにチャレンジし、工夫し、達成感を味わうものだと思っている。それが、心を育てることにもつながっていくはずである。今後も授業の工夫を続け、生徒一人一人と寄り添って心を育んでいきたい。



2年生「物言わぬものからのメッセージ」（静物画）の板書